歴史サークル４月例会を開催

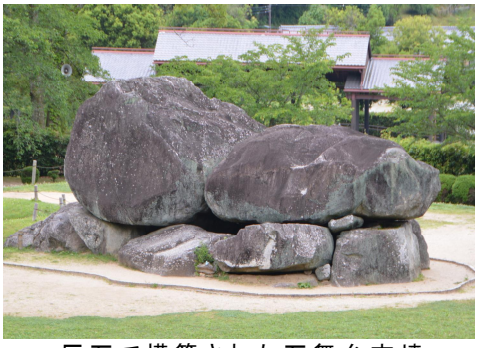
４月１７日（金）　２８期担当　１９名が参加

【史跡案内コース】
集合：石舞台古墳あすか風舞台
（ガイド担当者）
↓
①石舞台古墳
（川上　28 期）
↓
②都塚古墳
（川上　28 期）
↓
③坂田寺跡
（川上　28 期）
↓
④飛鳥稲渕宮殿跡
（稲見　28 期）
↓
⑤橘寺跡
（稲見　28 期）
↓
⑥川原寺跡
（稲見　28 期）
↓
⑦島庄遺跡
（稲見　28 期）

石舞台古墳東展望台から

石舞台古墳・あすか風舞台からスタート。菜の花が咲く東展望台（通称：タダ見の丘）に上り**石舞台古墳**の全景を眺めました。

説明によると、7 世紀前半築造の一辺約 50 m で、空堀、堤を入れると一辺約 81 m のわが国最大の方墳とのことです。石室は、巨石を使用した両袖式の横穴式石室、天井石は最大 77 トンもの大きさ。石材は、冬野川の上流・細川谷で採れる飛鳥石（石英閃緑岩）で、古代の運搬具「修羅（しゅら」（運搬用の木製そり）に載せて大勢の人々が縄で引きながら運ばれた様子を示したイメージ図のパネルで解説されました。被葬者は、『日本書紀』の記述から、推古 34 年（626）に亡くなり、“桃原墓”に葬られたと伝わる蘇我馬子とみられています。


巨石で構築された石舞台古墳

都塚古墳は、両袖式横穴式石室内部に石棺が現存する明日香村では唯一の古墳。来訪者はフェンス越しに刳り貫き式家形石棺を見ることができます。

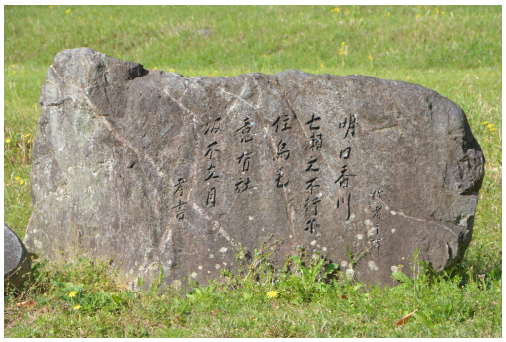
別名“金鳥塚古墳”といわれています。その理由は、正月元旦に墳丘の中から金の鳥が鳴くという伝説に由来しています。平成 26 年（2014 年）の発掘調査の結果で、“階段ピラミッド状の墳丘”をもつ大型方墳（全長 12.2 m）として注目を集め、同年 8 月の現地説明会には約 500 m 離れた石舞台古墳からの見学者が長蛇の列となったというエピソードが披露されました。なお、石舞台古墳地区や坂田地区は、蘇我氏の拠点で、被葬者は馬子の父・蘇我稲目が有力視されているとのことでした。

都塚古墳石室

坂田寺跡

坂田寺跡は、中国から渡来した司馬達等（しば・たつと）の子どもの鞍作多須奈（くらつくりのたすな）または孫の鞍作鳥（くらつくりのとり、止利）が建立したとの説が有力です。寺名は、飛鳥大仏の安置に功績のあった鳥（止利）が近江国の坂田郡内の水田二十町を賜り、それを造営に充てたことによります。日本に仏教の道を開いた最初の女性僧侶・善信尼（ぜんしんに）は達等の娘であり、ゆかりの深い寺です。7世紀後半には飛鳥五大寺1つ（他に大官大寺・飛鳥寺・川原寺・豊浦寺）にあげられ、豊浦寺と並んで格の高い尼寺でした。奈良時代には東大寺大仏殿の東脇侍を寄進した信勝尼（しんしょうに）の活躍が知られています。発掘調査からは奈良時代の遺構が出てきており飛鳥時代のものは今のところ分かっていません。「今後の発掘調査の進展により飛鳥時代の坂田寺の全容解明が期待されます」と締めくくられました。

飛鳥稲渕宮殿跡



稲渕宮殿跡に建立の万葉歌碑

飛鳥稲渕宮殿跡（国の史跡）は、昭和51年（1976年）の発掘調査で「**コ**」の字形に配置の掘立柱の建物4棟と川原石の広大な石敷き広場が発見されたとの説明がありました。

川原寺跡

築造時期は7世紀中頃といわれ、遺跡の規模は南北約170ｍ、東西約60ｍです。南向き四面庇の正殿と細長い東脇殿、後殿と細長い東脇殿が配置され、正殿は正面約24.6ｍ、奥行約10.2ｍ。後殿・両脇殿とも正殿側に庇を設けて、建物間の中庭に東西約10.2ｍ、南北約18ｍの範囲に、大きさ約40㎝位の玉石を敷き詰めた石敷き広場をもつなど整った建物配置です。石敷広場を有すること、瓦の出土が無いことから、宮殿中枢部の特色がみられ、『日本書紀』に記載がある、白雉4年（653）難波長柄豊崎宮（なにわながらとよさきのみや）から中大兄皇子・皇極太上天皇・間人皇女・大海人皇子らが飛鳥に戻って入ったとされる「飛鳥河辺行宮（あすかかわべかりみや）」ではないかの説が有力だと説明がありました。

「田道間守と橘寺」伝説を紙芝居で語る稲見さん

「橘寺」と「川原寺跡」では、両寺院とも創建時は飛鳥寺と同規模の広大な寺域を有する飛鳥時代の有力寺院で、「橘寺」

島（嶋）庄遺跡

は聖徳太子ゆかり、「川原寺」は亡き母（斉明天皇）の冥福を祈るため、中大兄皇子が建立したなどの説明がありました。

創建時の「橘寺」は東を正面として中門・塔・金堂・講堂が一直線に並ぶ四天王寺式の特異な伽藍配置、川原寺は東に塔、西に西金堂が相対して建つ一塔二金堂式の極めて珍しい伽藍配置との解説がありました。そのあと、『田道間守（たじまのもり・多遅麻毛里）』と橘寺の伝説について紙芝居風の説明がありました。

「橘」の地名は垂仁天皇の命により田道間守が 10 年の歳月をかけて常世の国から持ち帰った不老長寿の木の実 「非時香果（ときじくのかぐのこのみ）」、ミカンの原種をこの地に蒔き繁茂したことから興ったと伝えられています。「橘」は、お菓子のルーツとなるとの説明があり、注目を集めました。

島（嶋）庄遺跡で終礼

島（嶋）庄遺跡は明日香村大字島庄にあり、『日本書記』に大化の改新の前に中大兄皇子の宮を嶋大臣の家に接して建てたとの記載があり、縄文時代から中世までの複合遺跡があることが解説されました。

蘇我氏が滅亡後は官の所有となり、後に天武天皇が離宮を造りそれを草壁皇子に東宮として与え、嶋宮となったとも推定されています。大海人皇子は壬申の乱前に吉野へ向かう途中、壬申の乱後に勝利して飛鳥に戻る途中にもこの離宮に入っています。

石舞台古墳をバックに記念撮影

昭和 47 年（1972 年）から橿原考古学研究所により発掘調査が第 30 次まで行われ、石舞台古墳より北西へ約 200 m の地点で、一辺約 42 m の隅を丸くし、池底には川原石の敷石が全体に施された幅約 10 m の外堤をもつ、深さ約 2 m の方形池を発掘。現在も堤の一部を食堂の横の田で見ることができます。

池の東岸では北で西に 30 度振れる方位とわかり、池からは大型の食用になる桃の種も出土。島（嶋）庄遺跡は方形池、建物群、石舞台古墳などが一体となって構成されるきわめて、稀有な遺跡であるとの説明がありました。

（文：27 期佐藤　写真提供：16 期佐々木、20 期 北）